新潟県立村上高等学校同窓会関東支部

村高

題字　宮　絢子

2008.5.15　第19号
発行人　本間勝治
編集人　大滝　修
事務局
神奈川県川崎市
麻生区向原3-5-5
☎ 044(953)8368

我が青春のノスタルジア村高

2008 関東支部 同窓のつどい ご案内

「故郷は遠くにありて思うもの」、この犀星の一節がしみじみと心に響いてきます。同窓の皆さまはいかがお過ごしでしょうか。村上では、下渡山の新緑が眼に眩しく美しいに違いありません。

ここに、２００８年「同窓の集い」のご案内をお届けいたします。私たちは、昨年11月に実行委員会を立ち上げ、同窓会総会・懇親会の準備をしてまいりました。久しぶりの顔がすぐに打ち解けたのは、同窓なるがゆえの安心感があったからです。また、同期生と連絡を取る中で、故郷の仲間との再会を待ち望んでいることを知り、元気付けられました。

多感な高校時代の共通の思い出は、時を越えて、人と人とを結びつける力のあることを知りました。今年は、村上在住の同期生の尽力により、8月の七夕祭りで舞う獅子舞の上演、懐かしい村上の映像上映なども組み込むことができました。

皆さまに思い出深いひと時を過ごしていただけるよう頑張って準備しております。どうかお一人でも多くの方がご参加下さいますようお願い致します。

会長　本間　勝治
実行委員長　中村　修平
新制二十一回　実行委員一同

2007のつどいから

○とき
平成二十年六月十四日（土）
受付開始　正午より・午後一時開会
○ところ
スクワール麹町
千代田区麹町六―六
電話〇三（三二三四）八七三九
ＪＲ（中央線・総武線）
四谷駅前（麹町口）
地下鉄（丸の内線・南北線）
四谷駅
○会費
・男女とも　八千円
・平成十六年～十九年卒　四千円
・新卒者（平成二十年卒）無料
※会場準備の都合上、五月三十日（水）迄に出欠のご返事をお願い致します。

同期会だより

面影いずこに…
団塊最後六〇〇名世代
志田　裕（新制20回卒）

以前、と言っても2、3年前になるが村上の町並みの夢を見た。何かに追われているような、またただぶらぶらと歩いているような夢の中なので判然としない。村高の薄くくすんだ板壁の正門、松が植えられた車回しの玄関や、校舎近くの商店街等が白黒の映画で見るように浮かんでいた。

そんな夢を見たことも忘れていた一昨年、村上高校同窓会関東支部、「同窓の集い」の実行委員を引き受けてしまった。成り行きとは恐ろしいものだ。高校時代は友人も少なく狭い世界ですごしていた一番似つかわしくない者が何を血迷ったのか、まあ引き受けざるをえない所に追い込まれていたことは間違いが無いが。

ところが怖気ついてしまったのか、本来の気の弱さが現れ、その後の一歩がなかなか進まず、多くの人達をやきもきさせ、数人の実行委員から叱咤・叱咤の嵐の果てやっとの事、実行委員の人数を増やすべく、関東地区に住む同期生を集める事にして20回生第1回関東同期会を開くことにした。

同期会の核として数人の人達に助けを求め、何とか開催にこぎつける。団塊の世代最後に出てきた20回生は12組、６００名を超える学生数で、クラスが向こうの建て屋、こちらの建て屋と離れ離れに置かれていたために、高校時代には話をしたことも無い人、顔すら覚えていない人達が、40年近く経た姿で顔をあわせることになった。

受付では卒業アルバムが必須アイテムとなり、名前と昔の顔、そして現在の顔を見比べても、話に聞くようになかなか昔の面影なぞ浮かび上がるものでは無く、「何方？え？」、「あぁ～」の繰り返しが続く。しばらくすると会場のあちこちで塊ができ、その中では昔の顔が思い出されたように話が飛び交うのだが「カン」も働かず何も浮かび上がらず時間に埋もれてしまう。ところがある瞬間を過ぎると一人知人の顔に高校時代の顔が見つかる。すると驚くことに次々と周りの人たちの中にも当時の顔が見えてくる。高校時代の顔とは既に変わっているけれど、それでも以前の顔と言えるような同級生や見知った顔に変貌してゆく。

お互い知らなかったのでは、と思える人とも、友人が同じであったり、共通の話題が始まることで何時しか「村上高校」の雰囲気が周りに立ち上る。高校を卒業してからそれぞれの職場や家庭において長い年月を経て自分に重ねてきた「何か」が昔の思い出とともに薄くなり未だ何も覆うことの無かったころの姿が現れてくる。それとも自分たちの記憶にある影を映しているのだろうか。肩肘を張らず、自然体のまま、ゆったりとして穏やかな時間が流れ、始め奇妙なそれでいて懐かしい思いが広がっていた。おじさん、おばさん達の高校生が集まっていた。

多くの実行委員の力により関東支部総会が盛況に終了したがその後も同期会で出会った人たちが小さな核となり「ミニ同期会」を開いている。

ゴルフを楽しむ人たちで、昨年11月には村上高校の卒業生だけでなくその周りに集う、同郷の人、伴侶を伴い埼玉ロイヤルゴルフ、生越コースにて3組11名でコンペを開いた。更に年末には忘年会と称し10人強が集まり千葉県我孫子に在る「山階鳥類研究所」前にある「鳥の博物館」に出かけた後、夕食会を開いた。日常から高校時代へのタイムスリップ、非日常へと気持ちを移し当時の話題で盛り上がっている。

さて、次に村上の夢を見る時にはどのようなものになるだろうか？同期会で顔を会わせた人達が顔を見せるのだろうか、それとももっと記憶の底に沈んでいた人達が浮かび上がるのだろうか。楽しみなものだ。

臥牛会（ゴルフ愛好会）だより

川村　正（新制4回卒）

平成19年度第40回大会の開催と結果
・開催日　平成19年10月18日（木）晴
・場　所　千葉総武カントリー・あやめコース
・結　果（敬称略）

			ネット	ハンデ
◎優　勝	桜井久美子	(新制5回卒)	72	40
準優勝	伊予部国男	(新制8回卒)	74	9
第3位	横山　昇	(新制6回卒)	74	28
ベストグロス賞	伊予部国男	(新制8回卒)	83	

・天候にも恵まれ、成績は別として気持のよい一日でした。桜井さん初優勝おめでとう。伊予部さん安定したプレイお見事でした。久しぶりの参加、立派な成績でした。表彰式の後、懇談。楽しい一日でした。来年度も頑張りましょうと共々に誓い合いました。

※臥牛会（ゴルフ愛好会）では、スコアに拘らず一日楽しくラウンド出来る様企画し、皆様の参加をお待ちしております。
連絡先　鈴木　亮
電話　０４７（４４４）５１８３

思い出エッセー

あの日 あのころ いまじぶん

歴史に学ぶ

鈴木　恭子（新制9回卒）

仕事と育児に明け暮れていた頃、退職後の楽しみを夢みて集めた世界文学全集、CD、ブリタニカ百科事典。今は本棚に沈黙。読むにはあまりに文字が小さすぎた。何て無駄なことをと今は悔む。その代り歴史にはまって了った。40代にみたNHKの大河ドラマ「独眼竜政宗」から始まった。彼に関わる人々の物語を読むうち、古代から江戸時代まで至っていた。教科書で断片的なことしか知らなかった私にとって、歴史の流れは興味深いものであった。その頃、日本からまだ脱出していなかった私が、平成7年シルクロードの旅をして中国にはまり、8回も行って了った。これが動機となり、先輩に紹介されて「ローマ人の物語」「旧約聖書」を読み、ローマにはまり、西ヨーロッパや中東の数か国（特にオスマン帝国、イスラム世界の成立、イラク等）、次いで朝鮮韓国、やっと今パキスタンに辿りついた。世界を読むには時間が足りなすぎる。私の旅は歴史を尋ねること。今年はローマ人の発生の地・トロイの遺跡を中心にトルコを一めぐり。何層にも及ぶ遺跡は、深い感動であった。僅か数か国の旅しか経験がないので、不満足であるが、今のところボランティアが忙しくて、更に年金暮しはお金も足りず残念この上ない。個々の歴史を読む中で、世界の国々の関わりを通して歴史的背景が見えて来て納得する。古代から近代まで、領地拡張のため戦争を体験しない国はない。第2次大戦後、一応領地拡大によるものは僅かになっているが、今尚、民族、宗教、文化、大戦の後遺症による戦争が後を絶たず、胸が痛む。神代の昔から、どれ程の人が一人の人間の欲望による残酷な犠牲となったかはかり知れない。

歴史に〝もしも〟と言うことは学べる。それだけに私達は今こそ先人達の歩んだ歴史に学び、狂った方向に向かないよう英知を働かせなければならない時ではないか。世界は一人の人間から成りたっている。一人ひとりが真の平和を希求する基本に立ち、その国の進むべき道を選ばなければならない。

本は人物でも事件でもその立場で書けるので、読んだ本を一方的に信じる危険性を、今回朝鮮の「李王朝の滅亡」（片野治男著）と「歴史を偽造する韓国」（中川八洋著）を読み感じた。

江戸後期から第二次大戦に至るまでの日本の歩みに登場する有名人達が、どの様に世界の歴史に関わって来たのか、今回ばかりは驚ろかされた。紙面の都合で内容を書けないのは残念であるが、慰安婦や靖国神社問題等、本当に歴史をしっかり認識した上で、韓国に対応したのか、謝罪しなければならない根拠がどこにあったのか疑問であった。

とにかく、いかなる国も暗い過去を繰り返してはならない。一国の進路をあやまることのないよう、私達一人ひとりが果たす役割とその責任の重さをあらためて認識させられた。（東京・杉並区在住）

故郷忘れ難き候
〈冷や汁の味〉

丹田　公之助（新制10回卒）

近年、歳のせいか故郷と言う言葉が、妙に脳裡を去来するようになった。元来、故郷は遠くから想い、遠くから詩うという美化意識を持ち続けてきた。それは、再び帰り来ぬ、過ぎ去った時間への郷愁なのだろう。私の心の中には、三面川の鮭。その鮭の味とは別に、今一つ、忘却し難い望郷の味に対する想いがある。それは「冷や汁」の味である。

思いは遠く昔に巻き戻された・・・・・・。

真夏の蝉しぐれが、うつ蒼たる杉の木立に降り注ぎ、冷たい清水がこんこんと湧き出ていた。そばを滝矢川という渓流が流れ、滝（白滝と言う）か見事な、ばく布を描きながら落下していた。それは友人と2人、滝を見上げての昼食であった。おふくろの作ってくれた材料で冷や汁を作るのである。素材は、生味噌、キュウリ（薄くスライス）、小ネギ、トマト（薄くスライス）、しその葉を容器に入れ、冷たい清水を注いで出来上がりである。（氷を浮かべると清涼感が加わり一段と美味しい）。おにぎりをほおばりながら飲む冷や汁の味は、まさに、故郷忘れ難き味だったことを、つい昨今のように記憶している。

商業栽培の北限の地とされる村上茶を、冷たくし冷や汁で召し上がるのもお茶の甘味とコクが古い友のような味があり、機会があったらお試し頂きたい。

これも縁ではあるが、私の家内の出身地が宮崎であり、先だって帰郷の折に買って来たのが別紙の写真（冷や汁）である。

「冷や汁」の起源は鎌倉時代とされ、「武家、僧侶にては、ご飯に冷や汁をかけ参らせ候」との記録もあり、僧侶によって全国に流布されたが、今はほとんど廃れ、気候、風土に適した所に残ったとされるが、定かではない。（起源等ご存知の方はお知らせ願いたい）。遠くは離れ、気候、風土も全く異なった新潟と九州の地で、奇しくも同じ呼称の「冷や汁」で、舌鼓を打つことが出来るのも、人生の合縁奇縁ではなかろうか。

季節には一寸早いが今晩は冷や汁で行くか！

飽食時代に咲いた一風の爽涼食品の味を、ここにご紹介しておきたい・・・・・。まことに故郷と言うものは、忘れ難いものである。

（東京・あきるの市在住）

第二の人生は剣道修業

板垣　成也（新制13回卒）

剣道を再び始めたのは、スカウトされて転職した42歳からです。それから、かれこれ20数年剣道修業に打ち込み、61歳で7段に昇格、教士の称号を得ることができました。今、国際社会人剣道クラブの幹事、世田谷区剣連盟に所属し、町田市剣友会で指導する一方、女子大学で剣道の講師をしています。

私の職歴は、大学卒業後、昭和40年、ザ商社に憧れ機械専門商社に入社、町工場から大手ユーザーまで広く開拓し、販売実績が上がり、2年間の米国シカゴ駐在を経験しました。当時、アメリカと日本の企業規模の格差を痛感したものでした。

以来10年間は当時オイルマネーで潤っていたアラビア諸国やアジア諸国にプラントの付帯するワークショップ設備を輸出、三菱、IHI、伊藤忠、ニチメン、トーメン等と提携してきました。プラント輸出の停滞に伴い転職するきっかけとなりました。

剣道の始めるきっかけは3年先輩に憧れ、村高入学と同時に入部しました。当時の剣道部は安藤行蔵先生（7段）、五十嵐一男先生（5段）が指導され、そして1年先輩には、八藤後正幸、岩倉正男、大倉義博、当摩幸彦等の諸氏が居られ、規律正しい指導を受けることができました。村高3年間、勉強そっちのけで夢中で励みました。残念ながら何時も県大会のライバル・新潟商業の平沢氏、国体優勝選手の霜鳥氏に苦杯し、大学進学問題もあり、続けることをあきらめてしまいました。

再スタートしたのは、東京・世田谷区剣連に入ってからで、4段にもなっていました。剣連には、日本剣道の草分け的存在の小川忠太郎先生（範士9段）、大野操一郎先生（範士9段）が居られ、92歳のお歳で立ち合って頂いた事は良い思い出となりました。

平成3年4月、英国オックス・フォードに会社創設の命令を受け赴任しました。以来、帰国するまで12年間、市場開拓、マネージメント、そして現地社員の教育と多忙を極めました。当時、トヨタ、ホンダ、日産およびその関連会社が海外生産を始めた時で、設備機械や付帯機器を輸入してレギュレーションに適った設置をすることが急務でした。幸いスタッフは法令順守に対応してくれました。欧州の日本自動車産業の華々しい生産拡大を見る時、わが社が如何に海外生産に寄与してきたかと言う自負があります。

仕事が順調に進み、アービントンの剣道道場（白馬会）を任されるようになり、現地人10名を指導していました。また、ヒースロー近くの道場（無名士）では、現地人、日本人合わせ常時40名の剣士と剣を交えてきました。

オックス・フォード大学では、毎年9月の新学期には、60人の入部があります。ここから巣立った剣士達が今も世界中で活躍しています。また、英国剣道連盟の指導部として多くの剣道家と交戦しました。しかし、彼らはパワーや体力の違いで、ただガムシャラに打つだけです。私は、「心技体」の一致するところが、打撃の好機であると剣道の奥深さを教えてまいりました。

こうして、仕事の一方、剣道を通じて多くの英国人と深く知り合い、文化の違いを超えて、社会貢献が出来たと思っています。（相模原市在住）

タイで地震学の助言・指導

澤田　可洋（新制14回卒）

関東支部の先輩、後輩の皆様、新制14回卒の澤田可洋（さわだよしひろ、村上市二之町出身）と申します。今回こうして投稿の機会を与えていただき、有難うございます。

60歳の定年からこの3月で4年目。今、国際協力機構（JICA）の海外シニアボランティアとして昨年3月から来年まで2年間の予定でタイの首都バンコクにある天然資源環境省鉱物資源局ジオテクニクス部という研究機関に配属されています。専門分野は地震学。「タイで地震研究の指導ですか？」と良く聞かれます。確かに「タイでは北部で時々地震

がある程度、バンコクに地震はない」という認識の国です。しかし、２００４年12月26日のスマトラ－アンダマンのマグニチュード（Ｍ）９・０という巨大地震の津波でタイ南部では行方不明を含め８千人以上もの人が犠牲になりました。この国で津波という言葉が普及したのはこの大災害が契機です。

タイは周辺のミャンマーやラオスと比べて国内の地震発生頻度が少ない国といえます。しかし、国内には10を超す活断層帯が存在しており、首都バンコクから１３０㎞ほどのところにも活断層が分布しています。一部の活断層帯についてはいずれＭ７クラスの大きな地震が発生する、と指摘されています。

２００４年の津波災害をきっかけとしてタイ国内の活断層の実態を解明し地震発生の影響を評価しよう、という研究が発足しました。配属先では活断層で現在発生中の微小地震活動を解析する研究を進めています。私の任務は地震学の基礎、地震の観測と解析の手法、データ処理システムについての助言、指導です。とはいえ、この研究部ではこれまで誰も地震研究に縁がありません。

そんな中ではあれこれと苦労が続いています。でも、この国の地震研究者育成のお役に少しでも貢献したい、と念じつつ取り組んでいます。

さて、暑がりの私がどうしてこんな暑い国に来て、苦労しながら、汗を流して・・・と自分でも思います。きっかけは気象庁勤務時代に短期間ですがアジアの国の地震、火山の技術指導に派遣されたことにつながります。

自分の経験、知識、技術をこの国の研究や監視業務に役立てる機会を持ちたい、特に若い人への助言と指導にあたりたい、との想いが育っていました。定年後、幸い大学の教壇に立つ機会があり、学生達のきらきらと輝く眼（退屈な講義に眠そうな眼も）をとおして若い人に知識を伝える楽しさを感じたものです。そのあとＪＩＣＡ海外シニアボランティアに応募したしだいです。

団塊の世代に限らずいろいろな定年後の生き方があるようです。こればかりは人それぞれのチョイスですが、これが生きがいだ、と大上段に構えると重くなります。私の場合はすんなりと選べるものを選んだ、ということになるのかなー、と思っています。

（タイ・バンコック在住）

故郷雑感

瀬下　江二（新制21回卒）

故郷の村上を離れて40年近くになろうとしている。最初に上京したのは小学3年の時で、夜行の鈍行列車に揺られ、赤羽でやっと座れるまでは立ち放しであったこと、また、中学3年の時の東京方面への修学旅行では専用列車だったためか、早朝に乗車したものの、着いたのは夕方と相当の時間がかかり、東京とは何と遠い所なのだろうと思った。だが、学生時代や新幹線が出来る前の帰省は、特急「いなほ」で上野～村上間が、４時間半と随分時間短縮され、大分距離感も縮まった。現在では、新幹線「あさひ」と特急「いなほ」を乗り継げば、東京駅から3時間くらいで村上駅に着くことができ、昔と比べると隔世の感がしている。

村上へは、実家と墓がある関係上、お盆の時は必ず、その他、年に2回から3回は帰っている。時間を見つけては「お城山」（臥牛山・舞鶴城）に行く。天守閣跡から見る風景は、母校・村高跡地の村上市役所（平成20年4月から5市町村が合併し新スタート）や町並みの変化はあるものの、三面川から日本海へと続く景色は、昔と全く変わりなく、じっと見ているだけで気持ちが癒され、帰郷したことの実感が沸いてくる。同時に、高校時代の野球部での練習が思い出される。

当時「お城山」の登山道は、今みたいに整備されていなく、七曲がりをダッシュやうさぎ跳び、馬跳びを繰り返しながら天守閣跡まで行ったり、走って登ったりと、羽黒神社の階段などと並び絶好の基礎体力を鍛錬する場所だった。練習は相当きつかったが、その蓄積が今でも野球をやれうることや、職場まで約16㌔の自転車通勤を可能にしていると思っている。

帰省した時、昼食時に立ち寄るお店が二軒ある。一軒は第四銀行の北隣の「天茂」という焼きソバ屋で、味は絶品である。但し、ソースとお酢により自分で味付けをするため、ソースの掛け具合で味が全く変わってしまう。ソースを一寸多目に掛けるのが美味しく食べる秘訣である。もう一軒は、寺町のある中華ソバ屋「千国」で、昔は細工町にあったが、今はここで営業している。真夏のカンカン照りの日でも外に行列ができる程なので、味は確かである。しかし、城下町にある為か、いささか大名商売気味であり、昼食時の営業時間が短いので注意が肝要だ。この二軒のお店を帰省の際には是非お勧めしたい。

夜になると高校時代の友人達と一献傾けるのが最大の楽しみとなっており、同級生夫婦がやっている飯野町の「玄」というお店などで、喧々諤々の議論や情報交換をして懇親を深め、毎回元気をもらっている。町並みが変わった所の一つが、羽黒町の先にある山居前（現・山居町）で、子供の頃は一面田んぼだった為、雑魚掬いを目的に三角網（たも）とバケツを持って近くの小川に通ったものだが、今ではすっかり住宅や洒落たスナック等になっている。当時と目的は違うものの、相変わらず2次会などで山居前に出没している。

なるべく謙虚に、素直に、前向きに、そして元気に生きるように努めてきたが、今でもわが心を支えてくれるのが、故郷の自然の恵みや人情味であると、とても有難く感謝している。

（東大和市在住）

「求めない」

鳥屋　栄二（新制23回卒）

それは、昨秋、街のあちこちに前日の嵐の爪痕が残るある日の午後、東京・御茶ノ水の書店でのことでした。本を探しに行った息子を待つ間、ふと、店頭の平積みされた、その本に視線が止まったのです。その本のタイトルは「求めない」。手に取ってみると、それは詩集のようでした。そのタイトルに惹かれて、パラパラとめくってみたのでした。その時のことです。我が胸は、一本の矢に射抜かれました。そう感じたのです。そして、我が胸中に一条の光明が射し込んだのです。

話は遡りますが、近年、特にイライラして、何となく落ち込むことがあります。自ら、「男の更年期」などと誤魔化していますが、違うのです。正直に告白すると、それは、自分の半生に対する慙愧と後悔、それと、年老いて行くことへの不安なのです。職場の定年も間近い。したくなくとも、「人生の中間決算」をせねばならない年になってしまったのです。

そして、その結果に愕然としたのです。半生を振り返って見渡しても、自分の生きてきた「足跡」は何ひとつない。波の浜辺を流離ってきただけの半生だったか・・・。

これでも、「いつの日か、家族のため、世の中のため役に立つ立派な人間になりたい」と、子供のころから思い定めていました。しかし、これも身のほど知らずのことでした。

社会に出てこの方、「世の中の役に立つ」どころか、親孝行のひとつするでもない、今もって酒を飲むしか能のない、しがないサラリーマンです。こんな惨めな自分を確認して、こんなはずではなかったのに、と愕然とし、落ち込んでいるのです。

「求めない」との邂逅は、こんな憂鬱な日々の中で訪れたのでした。

その著者は語りかけます。「求めない。求めなければ、失望することもない、人と比べることもない。人生が楽になる」と。

省みて自分の場合はどうでしょう。「人に負けたくない」「出世して、いい格好もしたいし、金も欲しい」、その上に、「病気はしたくないし、年はとりたくない」。まさに、求めることばかりの半生でした。この見栄と我欲が自分を苦しめているのです。

こんな自分を著者は叱ります。「衣食住は足りている。それで十分ではないか。足るを知れ！」と。

見栄や我欲に呑み込まれそうになると、その声が聞こえるようになったのです。

もちろん、だからといって、いつも平常心でいられるわけではありませんが、心は楽になりました。そして、今まで深く考えることなどなかった、両親や祖父母の人生。ただ黙々と働きづめで、金や名誉などとは全く無縁だった、その人生の意味を想うようになったのです。

「求めない。求めなければ、失望することもない、人と比べることもない。人生が楽になる」。

これは、今まで温かく見守ってくれた家族や友人へのお礼とお詫びの気持ちも込めた、自らへの鎮魂歌です。

（さいたま市在住）

本間先生の思い出

前田　格（新制36回卒）

高校を卒業して25年になろうとしている今でも大切にしまっている英語のノートがある。英語のノートとはいっても、英語の文章だけではなく漢詩や和歌なども数多く書かれているノートである。

このノートの授業を担当されていたのは、本間桂先生。風貌は教科書に載っている島崎藤村そっくりで、文学者の雰囲気を漂わせていた。すでに御年は50歳を越えていた。

本間先生は、我々の英語の授業を担当されていた。先生の授業はよく「脱線」したが、それがまた楽しみであった。先生の話は、京都での大学時代の経験や、その当時読まれた本の事、キリスト教、仏教、和歌、漢詩、英詩など多岐に亘っていた。

先生は、御自分が高校生や大学生の頃に受けられた授業を思い、「教養」を得ることの大切さ、楽しさを我々に伝えようとされていた。

その中でも、英語の授業ということもあり、聖書の英文について良く話されていた。先生はクリスチャンではなかった（御実家は神社だったと記憶している）が、「教養」としての聖書を英語教育の中で伝えようとしていたのだと思う。

今でも覚えているのが次の英文である。

Enter by the narrow gate.The gate is wide that leads to perdition,there is plenty of room on the road,and many go that way ; but the gate that leads to life is small and the road is narrow, and those who find it are few.

この文は、新約聖書のマタイ伝の一文で、先生が板書をして、その前できれいな発音で読み上げている光景は今でもはっきりと覚えている。その発音を真似て、同級生と一緒に暗記をしていた。テストではこの"room"や"narrow"が空白となっており、これ

を穴埋めする問題が出題されたりしていた。

同級生の中には、受験にあまり関係のない内容の授業に対して戸惑っているものもいたと思う。しかしながら、当時は、インターネットなどもなく、知識は人から教わるか、書物からでなければ得ることができなかった時代である。そういう意味では、本間先生は自分にとって「教養」への窓口であったように思える。

先生との出会いによって、高校生という大切な時期に、受験勉強だけではなく、人生の糧となる「教養」を学ぶ楽しさを教えられ、それがこれまでの人生の中で、花となり実となってきた。

卒業からすでに四半世紀も過ぎ、娘もすでに高校生である。娘にも自分と同じような出会いをして欲しいものである。

（八王子市在住）

あの頃があって

飯沼　陽子（新制48回卒）

月日の経つのは本当に早いもので、新潟を離れて10数年が経ちました。お盆とお正月には毎年帰省していますが、その度に高校時代の友人や幼なじみから連絡をもらい、近況を語り合ったり、あの頃は特に何も感じなかった海や川や山の自然の豊かさに癒されたりと、心身ともにリラックスし、すっきりした気持ちで東京に戻れます。最近では、なかなか自分を解放できる時間や空間を持てずに、常にストレスにさらされている人が多い中で、こういう環境が手に入る私は本当に幸せだなと感じています。東京生まれの東京育ちの友に、以前「田舎があってうらやましい」と言われたことがありました。

その時はまだ学生時代で、あまりピンときませんでしたが、今はその気持ちが本当に良くわかるようになりました。

私の高校時代は、いい意味で「普通」の高校生活で、恵まれた日々だったと思います。先生方も生徒の自主自立を尊重してくださり、授業の受ける環境も非常に整っており、時間の流れも穏やかで理想的な学校だったように思います。もちろん高校時代は思春期真っ只中ですので、思い悩む日々もありましたが、クラスメイトや部活の仲間も、それを温かく見守り、そしてそっと手を差し伸べてくれるような友人たちでした。

当時の体育の授業は選択性で、何種目かある競技の中で一つを選び、グループで活動するというものでした。その中に「ジョギング」という種目があり、もともと走ることが好きだったのと、校外に出られるということに惹かれ、私は当然それを選びました。今では笑い話になりますが、毎時間コースを自由に決めることができ、ジョギングと言う名の散歩のような時間でした。瀬波の海岸まで行ったり、鮭公園まで走り、公園で時間をつぶすと称し、話しをしたり、遊んだりしたこともありました。たまに、先生がついてくる日もあり、その日だけは真面目に走りましたが、先生の後ろで友人たちと顔見合わせていたこともあります。今の時代には考えられないことかもしれませんが、先生も生徒もお互い信頼していたからこそ出来たことだなと感じています。

現在、私は東京都内で教員生活を送っています。養護教諭として、保健室から生徒たちを見守る日々です。母が教員だったため、教員は身近に感じてはいましたが、現代の学校においてとても重要な役割を担う養護教諭になろうとは一度も考えたことはありませんでした。私自身、学生時代は保健室にお世話になることはほとんどない生徒だったので、本当に不思議な縁だと思っています。現代の保健室といえば、傷病の手当てよりも、心のケアが大きな割合を占めています。

私の勤務している学校も、毎時間色んな生徒が駆け込んできます。漠然とした不満を抱え、常に不安に思う生徒と関わりながら、何が自分には出来るのだろうかと、私自身もわからなくなる時がありますが、そんな時でも、ふと思うのは、自分自身の高校生活です。支えて下さった先生方を思い出しては、それを励みに、自分の役割を探し出すのです。学校はただ勉強だけをするところではない、私が高校生活で味わった本当の意味での学校の良さを、生徒に伝えたいのかもしれません。

こうして教員としての、今の私があるのは、あの頃があったからだと思います。多くの人の信頼と支えてもらっていたことに感謝し、これからを担う子どもたちを通して、恩返しが出来たらなと思っています。

（東京・目黒区在住）

村上に思うこと

稲葉　和寿（新制50回卒）

成人してから釣りをしていない。

子供の頃、鮮烈に覚えている事に祖父と一緒に川遊び、釣りをしていた事がある。尤も、釣りよりも水鏡で魚を獲る事が性にあったので、釣りをしていないというよりも魚を獲る事をしていないといったほうが正しいかもしれない。東京には気軽に行ける川や海がないので、地元に戻ると川に行くように心がけているが、戻る機会があまりないのが悩みの種になっている。もう少し、村上に戻るのに時間とお金が楽になればいいと思う。うまく連携した電車に乗っても4時間弱かかるのは本当に辛い。折をみて親父と一緒に釣りに行ってみたいとは思う。三面川の西興屋にある釣り場にて、地下足袋履いて鮎釣りをする機会を見つけていきたい。

西興屋と言えば、あの辺りの川場は毎年地形が変わり、川幅と水流も違っていた事を思い出す。何が原因だろうかと思われるぐらい、毎年地形と水流が変わり、子供の頃は姿が変わるアトラクションの一つとしか認識していなかった。今考えると、簡単に水流が変わるのは大丈夫なのかと疑問に思ってしまう。三面川の支流程度ではそんなに影響が無いのだろうか。

三面川は村上を語る上で、なくてはならないもの。鮭漁を始め、上水道として古くから利用され、村上を支えてきたと私は思っている。おかげで、私が（兄弟が）一番好きな魚は鮭であり、ご飯と塩引きがある食卓は最高だと思っている。

鮭は、縄文時代には〝おすけ様〟と呼ばれ、村落の貴重な食料源とされてきたと聞く。また、スジコは保存食として、簡易に塩分が摂取できる食物として珍重され、交易に利用されたとの話を本で読んだ事がある。そんな古くから人と鮭には歴史があり、その歴史が今でも根付いている村上には誇らしさを感じる。誇らしさから、東京の友人が鮭を〝シャケ〟という度に〝サケ〟だという事を強調していたりする。友人からは変な目で見られるが。

鮭を骨も残さないで食べる、利用する。村上では普通に行われている事だが、これも誇れる事ではないだろうか。江戸時代でのリサイクル率は約90％以上だが、現代の日本は昔に比べて明らかに再利用しなくなってきている。そのような現状の中、余すところ無く食べる事をモットーとしたのは、先人の知恵と誇りがあったから、鮭は生活から切り離せないと考えていたからだと思う。

村上は鮭の町。鮭が回帰するように、村上で育ち旅立った人々が、地元に戻ってくるような街づくりを行って欲しいと思う。鮭は綺麗な川を好んで住むが、綺麗な川にするには怠る事の無い努力と整備が必要である。上京した人々が地元に戻るようにするにも、村上の街づくり（産業開発）への不断の努力と、交通の整備を行っていく必要があると考える。侍の時代を残す街並みと鮭への誇りがこれからも残る事を祈って。また、私自身も頑張れればいいと思っています。（東京・千代田区在住）

新生村上市に期待する

本間　健志（定夜11回卒）

この年になってようやく気持ちに余裕ができ振り返る事が出来るようになったのだが、時既に遅しと反省の日々。母の眠る菩提寺が村上に在るので時折帰郷するのですが、同級生と語り合う機会などほとんど無く、最近は旅人気分の帰郷です。大阪でリタイアして東京に戻り、終の棲家を埼玉県飯能市に決めてから時間に余裕も出てきたこともあって、昨年は珍しく何度か村上を訪れました。そんな故郷に感じた事を書いてみたい、そんな思いで同窓会機関紙の原稿依頼を引き受けた次第です。妻は東京・練馬産なので村上行きは何時も楽しみにしており、六斎市や街中での買い物や食事に立ち寄ったお店での会話など生まれ育った私よりも楽しんでおります。

二人で肴町あたりを歩いていて出会った数人の子供達に「こんにちは」と挨拶された事に驚きを感じた事、都会では失われたマナーです。そして立ち寄るお店の人達の旅人への対応が温かく、気持ち良かったことをあらためて感じた次第です。

この事は、例年ですと立ち寄るお店の人達は顔なじみでもあり気持ち良く対応するなど当たり前に思っていたのですが、昨年は二度ばかり村上をはじめて訪れる人達に村上を紹介する機会があり、山北、朝日、神林、荒川、村上町をドライブしながら案内したのです。一度目はカメラ仲間数人と秋田は西馬音内盆踊りの撮影の帰り道、瀬波温泉に立ち寄り、温泉に入り街中を案内した時ともう一度目は家族ぐるみのお付き合いをしているご夫婦を泊りがけで案内した時のことです。皆さんお世辞抜きに立ち寄ったところや接した人達の感じの良さをとても誉めてくれ、あらためて故郷を誇りに思いました。

瀬波温泉に2泊した友人夫婦は、現在ニュージーランド在住で、カナダにも住まい、海外多くの国を旅して回り、見聞も広く、会うたびに土産話を楽しみにしている友人夫婦です。その友人夫婦が、初冬の旅で村上のファンになってくれたのです。どのお店に立ち寄ってもローカルで素朴な温かさがあり、食べ物も美味しく、出会った人達の感じが良かったとべた誉めです。そんな故郷が広域行政区として、今年新スタートする訳ですが、同窓会の機関紙を通じて外野からエールを送りたいと思います。懐古的にならずに将来に向けて故郷の発展を願いながら、たまに帰郷し、他郷で暮らす、そんな村高出身者でありたいと思います。

そんな訳で私の勝手な新生村上市への提言

・子供達が将来に向けて夢が描ける町にしてほしい（子育てのしやすい住環境）

・美味しい水を生かした潤いのある町作りをしてほしい（街中に水路を復活）

・落ち葉の始末が大変だからと無機質な道路拡張は止めてほしい（木を植えて！）

・イベントが無くても散策できる町作りをしてほしい（何時でも楽しめるジョギングコース、元旦マラ

ソンコースからオリンピック選手なんて夢見るのも良いかも）

美味しく安心できる農産物等を今まで以上に発信して下さい。

温暖化が叫ばれて農業が今まで以上に重要なキーポイントになります。新生村上市は、まさに城下町に加え、山北、朝日、神林、荒川と魚業、農業、林業、牧畜、観光と理想的なエコロジー環境を持つ市となります。どんな未来図を描いての合併だったのか知る由もありませんが、政府のお先棒を担いでの合併でない事を祈ります。最近、村上藩家老鳥居三十郎と会津藩士伴百悦の武士道残照（恒文社）を読み返す機会があり、あらためて戊辰戦争で城下が焼き討ちに会わなかった経緯を知るところなり、また昨今不祥事の責任の取り方まで考えさせられる中島欣也氏の力作を皆さんにも是非一読をお勧めします。

明治22年、町村制が施行された時にも士族、町人の身分制度を色濃く残す村上町、村上本町の誕生や昭和21年の村上町と村上本町の合併。昭和29年町村合併促進法による村上市の発足から今回の合併に至るまですんなりとは行かなかったように思います。その障害の根底にあるものはなんであったのか考えさせられます。司馬遼太郎氏の峠という作品に長岡藩の家老河井継之助の事が最後の武士の生涯として描かれていますが、中立国家を目指したが、時勢のタイミングが合わずに最後まで戦わざるを得なかった長岡藩の河井継之助と病弱な藩主信民のもとに自藩の存立を求めて奥州連盟に組みして戦わざるを得なかった鳥居三十郎と武士としての責任の取り方に合い通じるものがあるように思います。

そんなことを思うにつけ同郷同士が集まると未だに懐古的に身分制度のこだわりを捨てきれずに見えない壁にわだかまっているのは何でしょう。同郷同士が集まると、なんとなく感じてしまうのは私だけでしょうか。温暖化が進むと水と食料自給が益々大切になります。新生村上市はエコロジー環境をもつ将来性のある町です。新生村上市を更に発展させて行くために出自のわだかまりの解消が根本的な課題のように思います。及ばずながら同窓の皆様のご健勝と新生村上市の益々の発展を祈念します。

（埼玉県飯能市在住）

新、村上市誕生　四月一日

村上市、朝日村、山北町、神林村、荒川町の一市二町二村の合併により、新村上氏が誕生しました。合併は四月一日付。これにより、村上市は人口7万人、面積の広さは県下第一位、人口は8位の市となりました。

村高　歴史への散歩道

旧新はざまの青春群像
「どん底」が上演された日

昭和23年11月14日

「夜でも昼でも牢屋は暗い・・・」木造旧校舎のほの暗い講堂―貧しい人達の吹き溜るロシアの木賃宿を模した舞台に低い歌声が流れた。

「一体この世に神様なんてあるのかね？」

「神様ってものは信じる者にはあるし、信じない者にはないさ！」。アル中役が空のビールびんを振り回しながら声も枯れんばかりに叫んだ。

「飲め、歌え、そして命の洗濯をしろ！」

しまいに掴んでいた椅子まで振り回し、その椅子に引っ張られて舞台から観客席に転げ落ちた・・・。

3年文科のクラス全員18名総出演によるマクシム・ゴーリキの「どん底」が芸能祭の演目として上演されたのは、新制村上高等学校が発足して間もない昭和23年11月14日ことであった。

戦後まだ日も浅い当時の状況を、初代自治委員長を務めた宝井重久(新1回)は次のように回想する。

「戦前の長い抑圧の反動で、自由と革新の風潮みなぎる半面、予科練帰りの復学者、高専や旧制高校の中退者、旧中からの編入者等、雑多な持主が集まっていた。教師も生徒も一様に混迷の日々を送っていた中で、どこか活気はあるものの殺伐としていた」

なぜ「どん底」であったのか。発起人の一人である菊地武（新1回）によると、同級の高橋猛と高孝三と「イデオロギー的な発想でなく、真の自治会を立ち上げよう」とのことであったという。前出宝井の回想によれば「例によって高橋猛君か演出、渡辺君が牧師ルカ爺さん、大平君はお巡りさん、板垣君はアル中、私は錠前屋になった。しかし舞台ではハーモニカの修理をやる役で、フォスターのスワニー川を吹いたりした」。

11月10日（水）舞台作り　2限にて放課
11日（木）芸能祭予行　11時半解散
12日（金）同2日目
13日（土）弁論大会
14日（日）芸能祭
15日（月）「化学への道」講演会
17日（水）演劇入賞組表彰

「男女共学はまだで、男性専科の時代であったから女役が珍しく、突っついたり、引っ張ったり、冷やかしたりで練習中もかなりの賑いであった」。お巡りさん役を演じた大平欽也はそう書いている。

順位は生徒の投票で決められ「どん底」はみごと1等に入賞した。因に、2等は2年「父帰る」、3等は劇研究会「盲目の弟」であった。

17日、朝礼時の表彰式、突然ストームの嵐が巻き起こる・・・。宝井の回想を引用してみる。

『リーダーの一人が優勝の盾を持っていきなりステージに駆け上った。我々はいま優勝の盾を獲得した。しかし、これは我が3年文科だけのものではなくて君達全部のものだ。現在の自治委員会は学校の御用団体にしか過ぎず、極めて無気力である。デモクラシーというのはこんなものであってはいけない。よって我々はここに不信任案を提出する。ウォーッという賛成のどよめきが起こると、用意されていた「デカンショ」のプリントが配布された。3年生が中心になってスクラムを組み、ストームが始まった。自治委員数名が私に駆け寄ってきて、どうしようと言った。私は一緒になってやれと命じた。私はただ唇をかんで傍観するしかなかった』。

実はこれは自治会や学校当局への反発に基く、準備された計画的なクーデーターで、委員長であった宝井は知るよしもなかったことであった。宝井の回想は続く。

「ストームの後、リーダー格が講堂の中央に腕組みして突っ立ち「何か異議はあるか？」と全校生に聞いた。下級生の一人が立ち上がって「貴方達のとった行動にヒロイズムはなかったのか？」と半ば詰問する言い方で言った。「ないッ！」と彼はきっぱり言った。「センチメンタリズムはなかったのか？」とまた聞いた。「ないッ」と彼はきっぱりと答えた。物理の加藤太一郎先生がつかつかと歩み寄ると、眼鏡の縁に手を掛けて「君達にそれほどの情熱があるならば、そういうことは放課後にやりたまえ！」と言った。リーダーは「はいッ」と答えて一件落着した。不信任案は成立し、私はクビになった」。

11月23日付毎日新聞新潟版は「理解出来るかーどん底―飛躍しすぎた新制高校の課外授業」と報じた。岩船郡の某高校と名指しはさけたものの「昔の中学校が修業年限を1年増した形で高等学校と呼ばれるようになったが、課外授業にゴーリキの『どん底』を演じて父兄を集めた芸能祭に公開したという。県の見解では、生徒にこれを理解する力があるかどうか、もし無理解のままなら不幸・・・」。

ゴーリキの「ドン底」は広く世界に知られた戯曲、これに挑むのは若者の特権。誠に余計なお世話というべきだが、当時の世相の一端が伺える。

「1学期の末頃から我が文科3年の中に何かが鬱積していた。これが芸能祭の表彰式の直後に爆発した」と宝井は書いている。また、鈴木清一（新3回）はその頃の状況を「22年後半から23年春にかけての過渡期には、毎日の授業も落ち着かず、校内は何となくすさんで、上級生が学園の民主化を叫んで校内デモを繰り返すなど騒然とした状態が続いた」と書いている。

翌、昭和24年卒業を迎える新制1回生52名は、旧中47回12名、併設2回47名（同窓名簿）と同時卒業という変則であった。加えて、新1回生は生徒の要求もあって文科と理科の2組に分かれていた。

文科は18名という少人数ということもあってなにかというとすぐまとまったという

教師として「どん底」の指導にあたり、後に児童文学者となる鶴見正夫（旧40回）は、この年の9月に赴任、半年間教壇に立った。宮本百合子の「歌声よ起これ」を黒板いっぱいに書き、新生日本の前途を論じたのが印象的だったと受講した生徒のひとりは述懐している。こうしたことから考えると「どん底」が上演された日は、旧新のはざま、混乱から抜け出す過渡期に揺れ動いた青春群像の一幕を象徴する日でもあったのだろうか。

6つのムと3つのラの校章が職員と生徒から公募してして定められ、校門の赤レンガの門柱に「村上高等学校」の真新しい門標がかかげられたのは、この年、昭和23年4月、女子一期生が入学し男女共学となったのは昭和25年のことであった。

（本稿は、村高80周年記念誌及び100周年記念誌の記録と回想を基に構成した。文中敬称略　文責・大滝）

ふるさと施設紹介

やすらぎの滞在型保養施設
温泉付きコンドミニアム　みどりの里

1300メートルの地層から湧き出る、毎分250ℓの65度の豊富な湯は、弱アルカリ性の肌にやさしい「美人の湯」温泉です。
天然温泉＋キッチン設備＆食器も付いたコンドミニアムスタイル。
お好きな食材でご自分で調理できます。
すぐ脇にはレストランも完備。
1階は和室とキッチン、2階洋室は5ベット付きの2階建別荘風の建物です。
ふるさとでの保養やレジャー・観光の拠点としてご家族で、お友達とご一緒でご利用ください。

〈みどりの里　付帯施設〉
きれい館（温水プール、サウナ、ラジウム）・またぎの家・日本玩具歴史館ｅｔｃ
＊入館料等はいずれも別料金となります

お申し込み・お問い合わせは
朝日　みどりの里
村上市猿沢（旧朝日村）1215
☎0254（72）6627
ご利用3カ月前の月の1日から予約受け付けいたしております

宿泊施設利用料金

人数	料　金
1名	5,900円
2名	10,800円
3名	14,600円
4名	17,500円
5名	19,300円

チェックイン16時
アウト10時

〈村高関東支部役員一覧〉

名誉会長	小川　景士	旧40回
顧問	長郷　邦男	旧44回
	渡辺　孝教	新5回
会長	本間　勝治	新9回
副会長	木藤　克子	新8回
	鈴木　亮	新9回
	小野　安雄	新10回
	佐藤　勝	新14回
	山本　宏平	新17回
事務局長	長谷川康夫	新10回
会計監査	川村　正	新4回
	菅井　真人	新13回
幹事	大平　金一	旧36回
	鈴木　喜一	旧39回
	富樫　利男	旧40回
	岩間　昌昭	旧42回
	近　五郎	旧46回
	船山　泰三	旧46回
	木村　一昭	新1回
	川上　孝	新2回
	小田　正二	新3回
	村川　赳	新4回
	湯浅　慶子	新5回
	中野　素子	新6回
	野中千枝子	新6回
	荒木　廣	新6回
	本間　岩雄	新7回
	齋藤　實	新7回
	林　節子	新7回
	市岡　貞雄	新8回
	中野　菊栄	新8回
	小池　悟朗	新8回
	関根　洋子	新9回
	小林　ミチ	新10回
	稲葉　喜重	新11回
	大滝　修	新13回
	小野　繁	新13回
	板垣　成也	新13回
	黒岩　紘子	新14回
	尾崎　茂	新15回
	川村　稔	新16回
	田所　和子	新17回
	本間　保	新17回
	濱中　壽子	新18回
	山下　治郎	新19回
	秋山　芳行	新19回
	志田　裕	新20回
	山田　真吾	新20回
	平山　恵美	新20回
	中村　修平	新21回
	瀬下　江二	新21回
	斉藤　勇一	新21回
	八藤　俊稔	新22回
	美濃　忠三	新22回
	鳥屋　栄二	新23回
	永井　賢吉	新26回
	中村　英之	新29回
	相馬　章	新30回
	丹田　安夫	新30回
	本間美恵子	新31回
	篠崎　泉	新34回
	前田　格	新36回

（平成20年3月20日現在）

●維持会費納入のご協力をお願いします

同窓会の活動運営を支える唯一の財源として、皆様に年間1口（2千円）以上の維持会費をお願いしています。なにとぞ添付振込用紙にてご協力をお願いいたします。昨年度は多くの方々からご協力を賜り、ありがとうございました。本年度もよろしくお願い申し上げます。

平成19年度維持会費拠出者（順不同　敬称略）平成20年3月20日現在

旧制
34回 井伊　哲郎
木村　正三
平山　譲
39回 鈴木　喜一
40回 富樫　利男
渡辺　功
小田　周平
小川　景士
前田　清三
41回 長谷川和夫
42回 斎藤　一郎
岩間　昌昭
稲垣嘉一郎
44回 長郷　邦男
46回 船山　泰三
近　五郎
奥村　有功
新制
1回 木村　一昭
菊地　武
2回 横田　謙輔
小野利恵治
川上　孝
小野　正夫
寺井　明夫
萩原　強
3回 富樫　栄一
遠山徳四郎
小田　正二
斎藤惣次郎
斎藤　奎二
森田　亨平
田中　照浩
佐藤　尚生
佐野　清廣
渡辺　陽喜
4回 大竹　茂久
川村　正
村川　赳
5回 佐藤　誠
青木　新一
村上　瓔子
稲葉　五郎
篠木　幸雄
上山　龍介
湯浅　慶子
渡辺　明犬
浅川　正友
櫻井久美子
宗村　承子
小田　勝四
5回 渡辺　晋
熊崎　英二
益田　智
横井　正義
遠山　雄平
佐藤　祐郎
菅　一郎
横山　芳男
青木恵美子
早川　佐智
渡辺　孝教
飯沼　孝
石田　薫
6回 山田　敏雄
野中千枝子
小野　裕子
外門　功
大平　悦子
長谷川　勝
岩倉　宏之
乾　良雄
花形キヨミ
荒木　廣
内山　忠
佐藤　修三
大平　恵吾
佐藤　洋子
7回 本間　岩雄
中村　泰而
鈴森　政秋
林　節子
齋藤　實
木村　保男
水野　貞
木村　雄次
佐藤　守
内山　安蔵
石本　久子
8回 宮坂　久子
市岡　貞雄
押切　助衛
八藤後剛輔
佐藤　タエ
根岸みのり
山口　捷平
大滝　正次
青木　テル
伊与部国男
本間　次郎
鷺山　ミキ
木藤　克子
赤見　市郎
8回 木村　浩
風間　隆治
中野　菊栄
板垣　三知
渋谷　善計
宮本　哲夫
合田　功子
川崎　昇
小池　悟朗
高橋　正
佐藤　彊介
9回 宮部　博明
本間　正英
中山　敏彦
佐藤　雪子
関根　洋子
八藤後栄祐
中村　宏
吉村美枝子
稲垣　伸夫
齋藤　吾郎
小田　忠夫
河内　勝彦
板垣　義郎
江藤由紀子
本間　勝治
風間　茂雄
平井　俊雄
鈴木　亮
川村　伸治
佐竹　英章
小川　稲子
宮本セツ子
10回 和田　久夫
小野　安雄
本城　賢司
小林　ミチ
小田　勝郎
岸野　洋
丹田公之助
鈴木　富夫
長谷川康夫
飯沼　敏夫
志田　荘
長島　昭
11回 小薬　晃
町田　信
佐藤　清
古川　宏
相馬　義嗣
川上　進
齋藤　吾朗
11回 稲葉　興武
大矢　秀男
12回 萩田こうこ
小林　正子
山本弥栄子
渡辺　慶子
齋藤　紘
菅原　和士
平山　進
山脇　昂
山宮　イツ
佐藤　訓子
野口　春樹
伊藤　正勝
当摩　幸彦
押切　共子
富永　茂子
石川　時子
大島　信三
月居　洋子
13回 大滝　修
磯部　正男
渡辺　輝男
前田　洋二
高橋　翼
菅原　明
板垣　成也
八幡　誠
佐藤　和夫
小野田祐三
小野　繁
佐藤　建夫
伊藤　衛
菅井　眞人
中村貴美子
14回 松永　純子
富山　久
細野　勲
佐藤　勝
早川　玖子
清野　勝子
村山　孝夫
貝沼ムネ子
小田　征人
土肥　直子
15回 佐藤　晴夫
笹本フミ子
松澤　正
伊藤満紀子
尾崎　茂
志賀　肇
小薬　稔
15回 鈴木　康夫
角替　キヨ
田中　ヒロ
鈴木　和代
寺井　賢二
本保　銀二
青山　光夫
鈴木益良雄
宮野美保子
田中　敏博
小田　洋雄
小田　毘古
16回 中尾　琼子
碓井　憲一
鈴木　愈
二宮　照子
川村　稔
石川　淑子
川村　忠久
中山　国男
佐藤　三男
小池　登
和田　洋美
17回 倉崎テル子
市川　房子
伊与部　健
山本　宏平
本間　保
太田　直也
永田　實
高橋　スイ
宮本久美子
富樫　芳次
品沢美代子
田所　和子
若穂囲　勇
小池正一郎
川島　也子
安井八重子
西村　正
宮　絢子
服部　芳朗
18回 小堀沙智子
渡辺美奈子
緒方　光彦
渡辺　三雄
福元　公子
篠原　広子
瀬賀　恵次
佐藤　せつ
平山　謙
濱中　壽子
18回 高橋　繁夫
相馬　喜春
19回 村山みち子
長坂三重子
河口富美子
坂中　良子
菅井　初雄
本宮　一子
新井　博子
安富　成良
宮川　泰子
美濃部千恵子
井上ミヤコ
佐藤　昭二
菅井小夜子
片岡　菊江
山下　治郎
山本　文忠
若林　さと
奥村　良作
20回 中村　謹一
渡辺　恭子
大平　達雄
穂坂富久子
畠山千恵子
平山　恵美
菊谷　令子
小松　友子
佐藤久美子
富野　竹子
真板　利子
田代　容子
肥本　久子
奥野　旬子
中村加和子
樋口　孝子
新沼たず子
成瀬　久子
齋藤　満男
本間　廣
阿部　周
和月　裕子
尾上　啓子
佐藤　方直
志田　裕
伊藤　陽子
山田　真吾
本間多喜夫
鈴木　陽二
小川　博道
羽深　大三
21回 飛田　啓子
21回 伊藤マユ子
斎藤　勇一
清水　正幸
本保　悦也
吉田恵美子
瀬下　江二
難波　光子
川上　幸男
高橋　美徳
中村　修平
遠藤きみ子
久保喜代子
22回 小池　博幸
鈴木　弥生
八藤後　稔
安藤とし子
八藤後和行
北岡　亮子
佐藤　裕治
23回 鳥屋　栄二
24回 山本千代子
25回 森井眞由美
26回 高田　眞一
27回 小田　芳光
石栗　忠彦
鈴木　武
28回 森　けい子
北畑枝里子
鈴木　和人
29回 大塚　寿子
青柳　礼子
山本　和代
中村　英之
30回 相馬　章
小田　徹
30回 中村　好
丹田　安夫
清野　篤
斎藤　司
永田　正喜
31回 本間恵美子
33回 鈴木　健一
35回 唐戸　悦子
36回 佐藤利枝子
38回 峰田　知己
40回 梶村　恵美
定時
11回 立花　俊道
細井ミツ子
本間　健志
関谷　福次